

「殖民地の旅」覚書

—佐藤春夫と台湾(三)—

蜂矢宣朗

停車場で乗車券を渡される時A君に教へられたが、胡蘆屯はこの駅からほんの二つ目かそこらで、時間も何れ十分か十五分の場合である。胡蘆屯とは言はば瓠が丘とも訳すべき面白い地名なのだ、近く役人共の猿知恵で豊原と改称される筈になつてゐるといふ。車室に落ちつく間もなく、A君はもう議論好きを發揮して、駅名改称可否論を論題に持ち出したものである。胡蘆屯といふ名は、内地人の耳にも必ずしも慣れ難いものではなく、悪い地名ではないものを、何故に改称しようとするのか。どこまでも日本風に呼び慣はさなければ、自国のやうな気持がせぬとでもいふのならば大国民らしくもないせこましい量見といふもの、殖民地には殖民地らしい地名こそ適當。さうして、日本の地理書に耳慣れぬ地名が沢山あるのを樂しむ位の心持があつても然るべきではないか。改称する方では別段大した意識もなくやる事ではあらうが、土民にとつては今まで折角呼び慣れて来た地名をむざむざと呼び変へられて、それも、意味もよく知れない外国語になるのは、決して愉快なものではないのだから、大した必要もなくこれを断行するのは徒らに民心を失ふといふもので、賢明な為政者としては断じて好んでこれを行ふべきではあるまい。必要があつて敢行

とならば、胡蘆屯の意味をそのまま瓠村とも呼び変へるとならば、これなら幾分妥協出来ないではないが、——事は一駅名の改称ではなく、土民の被征服的感情を唆るものである。尤もそれだけに、征服者にとつては、それと反対に愉快な感情を伴ふかも知れないが……などと、A君はなかなか理屈を捏ねる。この説には僕も賛成の意を表せざるを得なかつた。それで新名称の豊原の名の由来を問ふから、由来は僕に判る筈もないが意味は肥沃の土地の意だらうと答へると、

「然うですか、それはこの辺は台湾でも最も豊饒な土地には相違ないので、豊原の呼び名も日本の呼び名としては不相応とは思ひませんが」

と、この問題は昨日のもののやうに大問題ではないだけ、昨日のやうな激語も出ず、A君はあつさりと口角の泡を拭つて、最後に折れて出直した頃には列車はもう停止して、プラットフォームでは、問題の胡蘆屯の駅名を連呼してゐるのであつた。(註1)

右の引用は、佐藤春夫の「殖民地の旅」の一部である。大正九年(一九二〇)九月下旬、霧社から埔里を経て台中に下つた春夫は、「台中の某旅館」に一泊し、数日を台中に過ごす。その間の州知事の招待、鹿港見物、胡蘆屯の画人訪問、阿罩霧の林獻堂訪問などを軸に、感想を交えて綴つたのが「殖民地の旅」である。冒頭の引用文は、第二章の一部であり、胡蘆屯に画人を訪問する件りである。その前日、春夫は「A君」(注2)の案内で鹿港を訪ねているが、その途中、彰化の八景山公園に立ち寄り、「領台当時我軍が匪乱を鎮定した記念碑」の前で、「碑文のなかに用ひられてゐる匪徒とか賊徒とかいふ」文字についてのA君の激論を聞かされる。これが「昨日のもののやうに大問題でないだけ昨日のやうな激語も出ず」という表現になるのである。

このA君は、春夫の表現によると「この地方の中等程度の学校を二三年前に卒業してその後州庁の雇員に採用されたといふ、まだ二十歳を三つとは越えぬ青年であつたが」、鹿港に向かう車中でも「口角に泡を飛ばして」「光緒二十一年五月初旬を永清元年と改元して、唐景崧や陳李同劉永福等が相謀つて企てた、台湾民主国の建國運動の歴史を」春夫に説いて止まぬ情熱家であつた。

そのA君が春夫に向かつて、胡蘆屯を豊原に改めることの是非を論ずるのであるが、この部分の前段、地名改称否定の論鋒がなかなか鋭く、「この説には僕は賛成の意を表せざるを得なかつた」と春夫に言わせているのに比べると、後段の豊原について「不相応とは思ひませんが」と妥協してしまふあたりに、何となく不自然な感じがしないだろうか。

始めてこの部分を読んだとき、私は「豊原」という新しい地名の字面が悪くないので、A君もホコを収めたのだらうと、すなおに、軽く考へて読み過ぎてしまつた。しかし、始めの一般論で大上段にふりかぶつた勢いのよさに比べると「尻すばまり」というか「腰くだけ」というか、いささか妥協の理由が簡単に過ぎはしないだろうか。

もちろん、春夫は「A君の論」として紹介しているわけだから、A君の論の運び方が「腰くだけ」だったとすれば、しかたのないことだと考へることもできる。しかし「殖民地の旅」の中のA君は、八景山での議論といい、台湾民主国に対する情熱といい、それほどたよりない論客ではなかつたらしく思へる。かりに、そうであつたとしても、春夫の筆力でそれを補つて表現することは十分に可能である。

それから、また、逆に、A君の論はもっと激越であつたものが、春夫がやわらかく表現したのかも知れない、というような場合をも考へておかなければなるまい。そういう可能性は十分に考へられるからである。すでに「殖民地の旅」については、河原功氏の詳しいすぐれた

考察があり（注3）春夫がこの文章を書くにあたつて、当時の台湾における言論の取締りに対して多くの配慮をしていることがわかる。「A君」という匿名の表現（氏名も記憶にはあるがここでは仮にAと呼ぶとしよう）も、そういう配慮の現われと見てよい。

しかし、それにしても、台湾民主国については、ずいぶん大胆な意見をA君に述べさせているのだから、ここだけ遠慮させるには及ばないことである。また、別のところで春夫は「僕はただ彼等が裏面に於てはこのやうに好んで口舌の雄でありながら、或はAの如き、身は内地人に頗使される一小吏となつて榮達を計り、或は一般に好んで内地人と交を締することを名譽としてゐるかの如き風習のあるのを見ると、彼等の態度を卑屈として同感することの出来ない節も尠くないのである。」とA君を時代迎合型として描いているようなところもあるから、今の妥協的態度をその現われと見ることが出来るかも知れない。しかし、そういうタイプの口舌の徒も「口舌」の面では論客なのであるから、ここで卑屈な妥協をしなくてもよいのである。

そうすると、結局は、すなおに春夫の表現に従つて、大きな問題でない、豊原の字面が悪くない、論争の時間が短い、などの理由で論争を收拾したと考へておくのがよいのであろうか。

以上が、「殖民地の旅」の中の地名改称の件についての、私の考へたことのすべてであつた。ところが、つい最近、友人、井手至氏のご好意で「台湾の地名改称をめぐる二つの事件」（桜井澄夫・古今書院刊『地理』昭和五十七年七月号）という論考を見る機会を得た。これによると、春夫の表現にたゆたいの見た理由に、新しいひとつを加へることが出来るように思われる。

桜井氏によると、大正九年の地名改称が着任間もない下村宏民政長官の発意によると、当時これに対して強い反対論のあつたこと、そして「豊原」の由来は「豊葦原瑞穂国」（注4）にあり、近くに「瑞

穂」の地名も存在したこと、が挙げられている。

佐藤春夫の大正九年の來台が、中学時代の友人東照市の誘いによること、東の紹介で森丙牛の知遇を得たこと、森丙牛の斡旋で下村民生長官の庇護のもと、台湾における旅行に万般の便宜が得られたこと、などは春夫自身、台湾関係の作品の各所に書いているし、これについては、すでに述べたことがある（注5）。その庇護者であり、同郷の文壇の先輩でもある下村長官が、地名改称を打ち出した張本人であり、それに対する反対論がマスコミの世界を賑わしていることを、春夫は当然知っていたであろう。それだけに、反対論の趣旨に賛成であったとしても、あまりあからさまに過激な論を展開するのには、多少の遠慮があったと考えるのもよいだろう。もちろん、春夫の野人的な性格からして、言うべきことは言うという態度があり「殖民地の旅」の中にも、ずいぶん思い切った発言もして居る。それが「殖民地の旅」を収録した「霧社」の初版本（昭和十一年七月、昭森社刊）が、台湾では禁書扱いを受け、その再刊本（昭和十八年十一月、昭森社刊）の発行にあたって「殖民地の旅」を割愛せざるを得なくなった（注6）理由ともなったのではあるから、春夫がこの件にだけ妥協的になったとは考えられないという反論が出るかも知れない。しかし、春夫の態度に「殖民地の旅」に出てくる実在の人物に対してなるべく迷惑をかけまいとする配慮が見られること（注7）を考えると、やはり、心の隅に、下村長官に対する遠慮があったと考えるてよいであろう。

それは、A君から「豊原」の来由を問われたときの、春夫の返答の歯切れの悪さから推定できる。かりにも中等学校を卒業し、漢字の国に育ったA君が「豊」「原」の意味を知らなかったはずはない。（現に「殖民地の旅」の中に、彼の漢字についての知識の豊富さを裏書きするに足る部分がいくつも見られる。）つまり、A君の問は「豊葦原」についての問でなければならぬ。「豊原」が「肥沃の土地」の意

であることぐらい、わざわざ春夫に問うまでもない。従って、春夫もそのことを承知の上で「由来は僕に判る筈もないが……」と、とぼけて答えたのであろうし、A君も、春夫と下村長官の関係を知っていて、鋒を収めて引き下がることにしたのであろう。すでに、鹿港見物の理由をA君にたずねられたとき、森丙牛と下村長官のことが話題になっているし、そもそも、A君が春夫の案内役を命じられた段階で、下村長官の介在を承知しているはずだからである。

右のような経過で、私は、私なりの結論を得たように思う。もちろん下村長官の介在だけが、この部分のあいまいさを生んだすべての理由だと言うつもりはない。しかし、このことが見過ごされてはならない理由であることだけは納得してもらえと思う。

思えば、この「覚書」(註)は、河原・桜井両氏の論文に負うところが大きく、私は両氏の論文をつないでただけのことである。そして、その両論文を私に教示してくれた、下村作次郎・井手至の両氏に謝意を表する次第である。（昭五七、一一、一五、記）

注1、講談社刊「佐藤春夫全集」第七巻。かなづかい原文のまま、若干の句読点を加え、漢字体を常用漢字体に改めた。以下の引用文もこれに準ずる。

注2、A君が実在の人物で「許媽葵」という名であること、河原功、佐藤春夫「殖民地の旅」をめぐって（成蹊国文、第八号、一九七四・一二）に詳しい。それによれば、明治三十三年（一九〇〇）一月、鹿港に生まれ、台中一中の第一回卒業生であるという。従って「中等程度の学校」という春夫の表現は、台中一中の前身が大正三年（一九一四）に林猷堂によって創設された私立の中学であったためか。また、大正九年（一九二〇）のA君の年齢は数えの二一歳ということになる。

注3、注2の論文。

注4、記紀の天孫降臨の神話に出てくる日本の国名。

注5、拙稿「霧社」覚書——佐藤春夫と台湾——（天理大学学報、
第八五輯、昭四八・三）

注6、「再刊本霧社はしがき」に、春夫は「この集に描かれた台湾
はふたむかし前の台湾であり、この集に現れた著者も今日の面目
とは稍違ふものがある。初版中の重要作品であつた「殖民地の旅
」をしばらく除外した所以である。……」と述べているが、当然、
それを除外さざるを得ない状況がそこに存在したと考えてよい。

注7、このような配慮は、作品の随処に読みとれるが、特に「殖民
地の旅」の終わりの「作者附記——事は多く実に移せるも何分十
年前の記憶なるが上に、文は虚実折半せるを以て、拙文を以て累
を何人にも及ぼさざらん事を切望する。」に著しい。